

キ
キ
と
コ
コ

横浜のみなどみらい21駅で地下鉄を降りると、目の前のエスカレーターに長い列ができていたので、ぼくは階段を使って上り、パスモをかざして改札を出た。

マークイズの地下エントランスに向かって人の流れをかいくぐりながら、ジーンズのお尻のポケットからiPhoneを出して時刻を見ると、16時40分で、待ち合わせ時間にはあと20分もある。さあ、どうしようかと、立ち止まってあたりを見まわすと、改札口のすぐ横に立っている男と目が合った。ジーンズにヘリンボーンジャケットにホワイトシャツ、ウールのハンチング帽をかぶっている。誰だか知っている。でも、誰だったっけ？

向こうでじっとぼくを見つめる無表情もおそらくぼくと同じだ。誰だっけと頭の中の記

憶を検索しているのだ。

ほぼ同時にぼくらはニヤリとした。ほぼ同時にぼくらは相手が誰かを思い出したのだ。

ぼくは彼が瑚子のボーイフレンドだと言うことを。彼はぼくが綺々のボーイフレンドだと言うことを。

ぼくらはお互いに歩み寄るような形で、地下コンコースのまん中で「やあ」「やあ」とあいさつをした。

「お久しぶり」とぼくが言うと、「一ヶ月前くらいでしたっけ？」と相手が言った。

「そうだね」と答えると、彼は辺りを見まわし、「あそこで話しません？　ここだと通行の邪魔になりそうだし」と、地上階段のほうを指さした。

ぼくらは並んで歩き出した。

「もしかして、瑚子ちゃんと待ち合わせ？」

「早く着き過ぎちゃって。そちらは綺々ちゃん？」

「うん。なんなんだろう、同じところで待ち合わせって」

そう言って、ぼくは地上階段の横の壁に背中をもたせかけると、彼もぼくの隣で同じように壁に背中をあずけ、「なんか、企んでるんですかねえ」と首をかしげた。

「あ、国光と言います」と、ぼくがちよこんと頭を下げると、彼は「片岡です」とあごを突き出すように会釈した。

秋ももう終わりだからか、階段からじわじわと冷気がしみ出している。ぼくはピーコーの襟をかき合わせた。

「ちなみに、デートですよねえ？」と、ぼくが聞くと、片岡くんは「です。国光さんは？」とぼくを見た。

「同じ。なんか、ヘンだね、やっぱり。片岡くんたちとダブルデートってわけじゃないよねえ」と、ぼくはわざと笑顔を浮かべた。

「なんにもきいてないですよ、オレ。ふつう、なんか、言いますよね。ただの偶然なのかなあ」と片岡くんはまた首をかしげた。

「考えられるとすれば、二人一緒にみなどみらいで用事があった、それでここを待ち合わせ場所にしたりってことかな」

「かも、ですね。仕事ですかね？」

「仕事、っていうと？」

「ライブの打ち合わせとか」

「デビュー前なのにな？」

「デビューの日取りが決まって、そのためのイベントとか。ここらへん、赤レンガ倉庫とか、イベントやるところ、いっぱいあるじゃないですか」

「まあ、そうだけど。でも、綺々ちゃんは、デビューは早くて半年先って言ってたけど」

「あ、そうなんすか。オレ、知りませんでした。てっきり、時間の問題かと思ってた」

「CDの制作が始まっているからね、それで、そう思ったんじゃない？ 録音だのなんだかんだで、CD発売が来年の夏ぐらいになるらしいんで、そのころにデビューだよな」

「ですか。ま、けっこう忙しそうですもんね」

「瑚子ちゃんとは？」

「は？」と、地下通路を歩き交う人々を眺めていた片岡くんはぼくに視線を向けた。

「いつごろ、知り合ったの？」

「っすね、二ヶ月前くらいですかね。国光さんは？」

「同じぐらいかな。ぼくの番組に出てもらったんだよな」

「え、番組って？」

「FMでDJやってるんだよ。まだ週一の番組をいくつか持ってるだけだけど。それに出

でもらったんだよ」

「すげえ」

「インディーズで注目のジャパニーズ・アシッド・フォーク・デュオ、キキ&ココ。って」と、ぼくは番組で紹介するときの口調で言った。「ちよろどレコード会社と契約したところだよね」

「へえー。国光さんって、おいくつなんですか？」

「25」

「えっ、そんな若くて、番組もてるんですか。声、いいっすもんね」

「ぼくより若くて帯番組、持っている人、けっこういるよ。片岡くんは？」

「ぼくは二十歳です。学生です」

「瑚子ちゃんたちと同じ年だね」

「同じ大学なんです」

「大学で？」

「知り合ったのはクラブです。同じ大学ってことは、あとでわかって」

「瑚子ちゃんってクラブとか行くの？」

「あ、いえ、ときたま、行くらしいです、安斉マモルとかと。知ってますよね、安斉マモル」

「もちろん。だって、安斉さんのプロデュースでしょ、デビューCD」

「安斉ファミリーとときどき、遊んでるみたいです。綺々ちゃんも一緒で」

「ああ、そうなんだ」

「んでも、ときたまですよ。最近は、行ってないみたいだけど」

そうやって、ぼくも片岡くんも、それぞれが姉妹と知り合って間もないのだとわかったのだが、この二ヶ月という期間が、じゃ、互いの関係を深めるには不十分なのか十分なのかといえば、やはり人それぞれだろうと思う。ぼくはようやく2度目、いや3度目のデートだ。片岡くんは何度目のデートだろう。彼は身長はぼくと同じぐらい、170センチ台前半だが、スタイルも顔も流行りの雑誌モデルのようだった。つまり、おいしそうなチョコレートのスウィーツのようだ。彼のような男にとって瑚子ちゃんはどんな重みを持っているのだろうか。

「片岡くん、きょうのデートコース、決めてあるの？」

「デートコースって、なんか、恥ずかしいっすよね、その言葉」と片岡くんは笑いを隠す

ようにうつむいた。

「そうかなあ」

「国光さんはちゃんと、こう、レストランに予約入れたり、ごはんのあとはあそこ行つてとか、計画、立てるんですか？」

「まあ、いちおう、ポイントはね、押さえるよね。片岡くんは行き当たりばったりとか」

「どっちかっていうと、そうすね。てか、相手が決めることが多いです。オレの場合、そういう、受け身が多いです」

「そうなんだあ。楽ちんそうだな」

「それに、きょう、クルマなんで」

「ああ、クルマなんだ。何乗ってるの？」

「兄貴の車ですけどね、ミニっす」

「BMWの？」

片岡くんはうなずいた。

「いいねえ」

「国光さんは？」

「クルマ？」

「はい」

「持っていないし、あまり運転もしないなあ」

「じゃ、移動は歩きですか？ どこ行くんすか、きょう？」

「象の鼻から5分くらいのところね、海岸通りに面した古いビルがあるんだ。そこに入っている古めかしいレストランを予約してある」

「古いって？」

「どのくらいか、わかんないけど、けっこう、いや、ものすごく古い。威厳があるね。スカンディヤってね、北欧料理のお店なんだけどね。そこでディナーをする。デンマーク風ミートボールってのがあって、すごい、おいしんだよ。そこにいるとね、日本じゃない、外国にいるみたいにな気分になれる」

「あの、さっき、象の鼻っていいました？」

「うん」

「なんすか？」

「あのね、大栈橋は知ってるでしょ？ その根もとのほうにある、小さな栈橋で、象の鼻

の形にカーブしてるから、象の鼻棧橋っていうんだよね」

「食事のあとは、なに、すんですか？」

「食事の後じゃなく、食事の前だね。工場夜景クルーズ」

「え？」

「船に乗ってね、川崎あたりの工場の夜景を海から観るんだよね。ものすごくキレイなんだ」

「それも予約済みですか？」

「うん。チケット、買ってあるよ。片岡くんも、こんど、瑚子ちゃん行ってみるといいよ」

「なんか、おたくっぽくないですか」

「そうかなあ。ぼくね、一度、番組の取材で船に乗って見たんだけどね、はまったね」

「でも、工場ですよ」

「いや、だから、その工場の夜景がものすごくキレイ。まるでね、未来都市のように見えるんだよ。ほんと、すごいんだって。小さな船でね、船長さんが解説してくれるんだけど、ここが光のモンサンミシエルですって言ったところなんか、ほんと、まさにその通りだっ

て思ったもん」

「モンサン……?」

「モンサンミシエル、知らない? フランスの修道院。世界遺産だよ。あのね、えーとね、江ノ島みたいところが、まるまるね、巨大な修道院になってるんだよ」

「へえ」

「石油の精製工場がね、光でできた、そのモンサンミシエルに見えるんだ。幻想的って陳腐な言葉だけどさ、まさに、そうとしか言えないような光景でさ。綺々ちゃんに、それ、見せたくて」

「国光さん、DJしてたら、芸能人とかミュージシャンとか、たくさん会いますよねえ」と、片岡くんが脈絡なく話題を変えた。

「いや、そうでもないよ」

ぼくの頭の中にはまだ、夜の東京湾に浮かぶ、何千何万もの青白い灯りが積み上がってできた光のモンサンミシエルの光景が、鮮やかに映し出されていた。

「ぼくはまだキャリアが短いし、番組もコアな音楽ファン向けだから、知る人ぞ知るみたいなミュージシャンとか、それこそキキ&ココみたいなインディーズでブレイクした新人

とか、そんなひとが多いかな」

「へえ。どこの局ですか、番組は？」

「トーキョーウエイブと横浜ベイFM」

「どメジャーじゃないっすか」

ぼくはそれに応じる言葉を飲み込むと、iPhoneを取り出して時計を見た。10分が過ぎていた。約束の時刻まであと10分だ。

ぼくはあらためて、こうして片岡くんと一緒に彼女たちを待つ意味を考えた。彼女たちの移動の都合なのだろうとは思うけれど、だとしても、同じ場所にするだろうか。もしかして、お互い、つきあっているボーイフレンドを見せ合おうと相談したのだろうか。くらべられるのはイヤだなと思った。だって、外見だけで言ったら片岡くんの圧倒的勝利に決まっている。

「国光さん、知ってます？」

片岡くんが言った。

「一卵性双生児って、DNAもぜんぜん同じなんですよ」

「え、そうなの？」

「だから、DNA鑑定しても、どっちが綺々ちゃん、どっちが瑚子ちゃんかわからないわけですよ」

「へえ、すごいね。っていうか、知らなかったよ。じゃ、指紋なんかも？」

「生まれたばかりのときは指紋もおんなじなんですけど、指紋ってのは、生活のしかたで少しずつ変わっていくらしいです」

「ということは、癖とか、楽器やっていると、スポーツしてるとかで、微妙に変わってくるってことか」

「っすね。めちゃくちゃ面白くないですか？」

そういつて片岡くんはぼくに向かって大げさにアピールした。

「うん。なんか、推理小説のトリックに使えそうだね。一卵性双生児のどちらが犯人か。

DNA鑑定は決め手にならない、なんてね」

「瑚子ちゃんから聞いたんですけど、お父さんも、お母さんも、いまだ間違えるみたいですよ」

「どっちがどっちか？」

「はい。だから、ときどき、だまして遊ぶって」

「ご両親を？」

「っす。親でもわかんないもんなんですかね」

「確かにね、見た目、そっくりだもんなあ。しかも、二人、洋服をシェアしてるでしょ」

「あ、ファッションの趣味も一緒ですもんね。ヘアスタイルも、基本、一緒だし」

「声もおんなじだし」

「なんか、心配になってきませんか？」

「え？」

「だって、今からもしも二人一緒にやって来たとして、どっちがどっちってわからなかったら、どうします？」

「確かに……。いままで、こんなこと、なかったもんね」

「自分から、声かけないことっすね」と片岡くんは自分で言っただけでうなずいた。

「確実に見分ける方法って、あるんだろうか」と、ぼくは聞くともなく聞いた。

「ギターじゃないっすか」

「ギター？」

「綺々ちゃんはギターを弾くけど、瑚子ちゃんは弾かないじゃないっすか」

「ああ、確かに。瑚子ちゃんがメインボーカルで、綺々ちゃんがギター弾いてハーモニ
だもんね」

「だから、指紋、違ってますよ」

「ん？」

「ギター弾いている綺々ちゃんと、弾かない瑚子ちゃんは、指紋が違うはずってことです」

「ああ、そうか。そうだね。それに、ぼく、ギター弾くからなんだけど、左手の指先が堅
くなって皮が厚くなるんだよね。弦を押さえるから」

「へえ」

「だから、左手の指先の方が厚くて堅いと、ギターを弾いているってことになる」

「なるほど、それ、重要ポイントですね」と、片岡くんはまじめな顔をして、それから腕
組みをした。少し考えてから、こう言った。

「別々に待ちませんか？ 一緒にいるんじゃないか」

「え？」

「そのう、こうやって、ふたり並んでいると、向こうもふたり一緒にやって来るじゃない
ですか。っと、どっちが綺々ちゃんか、瑚子ちゃんか、ややこしくなるでしょ」

「ああ、そういうことか」

「別々に離れて待ってれば、瑚子ちゃんはオレんどこに向かってくるし、綺々ちゃんは国光さんのほうにいくでしょ」

「確かに。でも、そこまで気にしなくても」

「オレ、自信、ないっす。瑚子ちゃんを、なんていうんですか、判別する」

「傷つけたくないってこと？」

「まあ、そうっすね」

「じゃ、そうしよう……と言いたいところだけど、もう来ちゃったよ、ふたり」

片岡くんは見るからにあわてた表情を浮かべて、急いで改札口のほうに視線を投げた。

姉妹はぼくらを見つけると、改札口の向こう側で大きく手を振り、二人順番に改札を抜け出た。二人ともボトムはジーンズ（しかも、ベルボトム！）で、どこのブランドかわからないクラシカルなスニーカーを履いている。先頭に立っているどちらかさんのトップは、グリーンのセーターの上に50年代っぽい大きな丸襟のついたグレーのジャケットで、そのまま長い髪を両脇に垂らしているし、後ろのどちらかさんのトップは、黒いハイネックのセーターに60年代っぽいペーズリー柄のサイケなジャケットをはおり、ポニーテール

にしていた。

オーラがあると言うけれど、そのオーラの正体とはそのひとの思い込みにちがいないと、ぼくはいつも考えていたのだが、いまこのとき、やはりオーラという謎の物質、謎の放射線は存在するのではないかと思った。姉妹は目も口も大きく派手で、長い足と長い首を持っていた。身長は160センチと少しぐらいたろうが、小さな頭のせいで、背がもつと高く見える。その姉妹が真っ白な歯を輝かせて、ゆったりとこちらに向かってくるにしたがい、周囲の視線と一緒に、何かしら光の粒というか、つまりオーラなのだが、そういう謎の放射物もまた引きつれて来るように見えるのだ。

それは確かに、一卵性双生児という一種の錯視的な幻惑によるのも大きい。つまり、言葉は悪いけど、二人が一緒にいればそれは一種のスペクタクルとなるのだ。

さて、どっちが綺々ちゃんで、どっちが瑚子ちゃんなのか。片岡くんの不安がぼくにも伝染してきた。

片岡くんの言うように、別々に待てばよかったと、ぼくは後悔した。どちらに、なんて声をかけたらよいのか、ちっともわからなかったからだ。ぼくと片岡くんは、結局、こうした。

「やあ」

「やあ」

ぼくらは、ただそう言って、笑顔で姉妹の顔を見くらべた。

横浜のみなどみらい21駅で地下鉄を降りると、目の前のエスカレーターに長い列ができていたので、ぼくは階段を使って上り、パスモをかざして改札を出た。

ライブの開演まで時間がまだだいぶあったけれど、すこぶる暑かった夏の日の夕方に、夕焼けの光に染まりながら海風に吹かれ、赤レンガ倉庫までブラブラ歩いたら気持ちいいだろうなと思ったのだ。

マークイズとは反対側、クイーンズスクエアの大エスカレーターのほうに歩き出したその時だ、ぼくはデジャブのような感覚に足を止めた。

なんだろう。なにが一緒なんだ。

右手の地上に続く階段の横の壁に、もたれかかっている男がいる。ジーンズに薄いブルーの縦ストライプの入った半袖のシャツ、長髪をオールバック風にうしろに撫でつけた頭の上にサングラスがのっている。長い足に、上半身のちょうどいい具合の三角シルエット、長いまつげの甘い目。だれだっけ？

ぼくが目をそばめて見つめると、向こうもぼくに気づいて、同じように目をそばめた。ほぼ同時にぼくらはニヤリとした。ほぼ同時にぼくらは相手が誰かを思い出したのだ。

ぼくは彼が瑚子のボーイフレンドだと言ったことを。彼はぼくが綺々のボーイフレンドだったと言ったことを。

ぼくは軽く手を振ると、彼に向かって歩いて行った。

「片岡くんだけ。いやあ、ものすごい偶然だね」

そう言うと、彼はお尻のポケットから何かを取り出した。

「いや、必然ですよ。だって、これに來たんでしょ？」

彼の手にはキキ&ココのデビュー記念ライブのチケットが2枚あった。

「ああ、そうだね、必然だね」

「送られてきたんですよ、このチケット」

片岡くんは意味ありげな笑みを浮かべた。つまり、目だけが笑っていない。

「友だちと待ち合わせ？」とぼくは聞いた。

「彼女っす」

「彼女？」

「は」

「珊瑚ちゃんとは？」

「あれ以来、会ってないです」

「あれ以来って、もしかして、あの日以来ってこと？」

「国光さんでしたよね」

「うん」

「今みたいに、国光さんと一緒に二人を待った、あの日以来」

「え、そうなんだ」

ぼくは驚いた。

「国光さんは、まだ綺々ちゃんと？」

「ぼくも、あの日以来、会ってない」

こんどは片岡くんが驚いた。

「なんか、あったんすか、あの日？」と片岡くんは暗い表情で聞いてきた。

「うーん、あったといえよ、あったし、なかったといえよない」

「確か、象の鼻の近くのレストランに行ったんですよね？」

「うん。おいしかったよ。いまでも、覚えてるよ、何を食べたか」

「へえ」

「前菜がね、えーと、エスカルゴだ。それとスモークサーモン。メインはね、ぼくが子牛のソテーで、綺々ちゃんがフリカデラ」

「なんすか？」

「デンマークのミートボールだよ。綺々ちゃん、おいしい、おいしいって言った」

「それから夜景、見たんでしたっけ？」

「いや、夜景は食事の前。サンタバルカ号に乗ってね、光のモンサンミシエルを見て、それから、このランドマークタワーとかクイーンズスクエアの下まで船はやって来てさ、その夜景もものすごくキレイで。綺々ちゃん、すごい喜んでた」

「その後にミートボールですか」

「うん。象の鼻でサンタバルカ号を降りてね、レストランまで歩いて行って」

「サンタなんか号かって、でかい船ですか？」

「ぜんぜん。定員30人とかの小さな船だよ。船長さんが言っていたけど、サンタバルカって、スペイン語で『聖なる小舟』って意味なんだって。すごい記憶に残ってる。『聖なる小舟』だもん……。そうだ、そうだ。あのとき、一卵性双生児はDNA鑑定でもどっちがどっちかわからないって話、してたでしょ。覚えてる？」

「あ、はい」

「ここで片岡くんと瑚子ちゃんと別れたあと、ぼくらは地下鉄で日本大通りまで行ったんだけど、ぼく、地下鉄の中で何したと思う？」

片岡くんはキョトンとした表情で首を横に振った。

「綺々ちゃん、手を見せてって、指先を調べたんだよ」

「なんでです？」

「忘れたの？ 片岡くんが言ったんだよ、ギターを弾くほうが綺々ちゃんだって」

「ああ」

「なーって綺々ちゃんが不思議がるから、指先占いとか言ってる、見たわけだ。そした

らね、左の指先、皮が厚くて、ママができた跡もあったりしてね、もう、完全にギターを弾いている人の指先だった。つまり、綺々ちゃんは綺々ちゃんだってこと」

「ええ？」と片岡くんは驚いたような声を上げた。なにに片岡くんはびっくりしたのだ？

「どうしたの？」

「いえ」

片岡くんは唇を尖らせるようにしてつきだし、考え事をするかのように何度も頭を振った。

「食事のあとはどうしたんすか？」と片岡くんがきいた。

「きわめて紳士的にさようならをして、それぞれの家に帰ったけどね。だって、もう夜の11時近かったしね。それにさ、綺々ちゃんたちの家って、鎌倉じゃないか」

片岡くんは、うなづくように何度もゆっくりと首を振った。

ぼくが片岡くんに聞く番だった。

「片岡くんは、ドライブに行ったの？」

片岡くんは、ゆっくりとうなずいてから、視線を改札口のほうに向けた。待ち合わせている彼女がやって来たのだろうか、ぼくも思わず同じ方向を振り向いた。

「彼女、来たの？」

「いや、まだみたい」

ぼくは視線を片岡くんに戻すと、こう言った。

「瑚子ちゃんからさ、電話があったんだよ」

「え、いつっすか？」

「いつっていうか、あの日だよ。ぼくが家に帰ってから、しばらくしてだから、午前1時すぎくらいかな」

「なんてですか？」と、片岡くんは無表情にぼくを見た。

「綺々ちゃんが帰ってこないって。どうしたらいいんでしょうって」

「で？」

「11時ごろに横浜駅で別れましたよって、そう言ったら、なんかあわてて電話を切られちゃった」

「それで、どうしたんですか」

「そりゃあ、心配になる。だって、横浜から鎌倉まで、30分くらいだよ、横須賀線で。ぼくも綺々ちゃんの携帯に電話したけど、留守電になって通じない。いや、ほんとうに心配

だった。鎌倉駅から家までのあいだになんかあったんじゃないかってね。いつも、夜遅いときは駅からタクシーで帰るって言ってたから、まさかとは思ってたんだけど、でもね、やっぱり、不安でたまらなかった」

片岡くんはごくりとツバを飲んだ。

「それからまた電話があったんだ、瑚子ちゃんから。これは時間をはっきり覚えている。午前2時半。ぼく、心配で眠れなかったからね、時計とにらめっこしてた」

「瑚子ちゃん、なんて？」

「綺麗ちゃんがまだ帰らないって、こんどは、泣いてるんだよ、電話口で。しくしく、しくしく」

片岡くんは、ハーツとため息をついた。

「泣きやまないんだよ、瑚子ちゃん。どうしていいかわからなくてさ。警察に相談してみようかって、ぼくが言うよね、瑚子ちゃんがこう言ったんだよ。いいんです、大丈夫です、綺麗ちゃんがどこにいるかわかってますからって。ぼくが、どこにいるんですかって聞いたら、また、しくしく泣き始めて、で、ガチャリ。電話が切れた」

ぼくは、あの夜の不安を思い出した。もしも綺麗ちゃんに万が一のことがあったらと思

うと、胸がドキドキしてならなかった。だから、瑚子ちゃんが綺々ちゃんの居所がわかったと言ったときは心底安心した。だが、一方で、瑚子ちゃんに泣きながら一方的に電話を切られたことの奇妙さが、消化しきれない食べ物のように朝までずっと心に残った。

「それ以来、ぼくは綺々ちゃんはもちろん、瑚子ちゃんとも一切話をしてないんだよ。電話をしても出てくれないし、メールをしても返事をくれない。それなのに、きょうのライブのチケットだけは送ってくれた、2枚もね。ま、1枚でいいんだけどね、ぼくの場合」片岡くんがぼくの肩越しに何かを発見し、その顔がパッと明るくなり、両手をあげて大げさに振りまわした。

改札口のほうを見ると、同じように両手を大きく振りまわしながらこちらに向かってくる女の子がいる。ヒールの高いサンダルに細い足がのり、白いミニのワンピースの大きく開いた胸元の上では、細いあごと大きな目を、栗色の長い髪が両脇からくるくるんと包んでいた。

「わーい」と女の子は瞳をキラキラさせながら大またで近づいてきた。

「待ったあ？」

「ぜんぜん」

女の子は、それからぼくを見てニッコリとした。片岡くんが言った。

「知り合いの国光さん」

ぼくはちよこんと頭を下げて会釈した。

「国光さんも、ライブ、行くんだって」

「へえ。よっちゃん、クルマに乗せてってあげれば？」

「あ、そうだね。国光さん、乗っていきます、赤レンガ倉庫まで？」

言葉とは裏腹に、片岡くんの表情には拒絶するようなこわばりがあった。ぼくは首を横に振って言った。

「いや、大丈夫。ぼく、ここらへん散歩したくて、早く来たんだ。歩いたらさ、すごく気持ちよさそうじゃない、きょうなんか」

片岡くんは、心なしかホッとしたような表情を浮かべ、「じゃ、ぼくら、先に行つてます。駐車場、あっち」と、片岡くんは女の子の肩を抱くようにして、クイーンズスクエアとは反対側へさっさと歩き出した。

人混みに溶け込んでいく二人の後ろ姿を見ながら、片岡くんがなんとなく素っ気なく、なにかしらぼくを避けたがっているようだと、げげんに思った。と同時に、今まで考えて

みたこともなかったあることが、頭のどこかのシナプスでバチバチと化学反応を起こしながら、少しずつ大きくなっていった。

ぼくは、3階ぶち抜きの大エスカレーターでクイーンズスクエアの1階に出ると、そのまま建物を突っ切って外に出た。

目の前に運河があり、右手のほうには帆を畳んだ日本丸の白い船体が見えた。

日本丸のさらに右側では、ランドマークタワーが固まった巨人のようにして突っ立っていた。背後では、まだ沈みきらない夕陽が緑や青や緋色や橙やレモン色や、実にさまざまな色の輝きで大気と雲を染め上げていた。どんな絵の具よりも澄み切った色、どんなコンピュータも計算不可能なグラデーションの美しさを見るたびに、ぼくはいつも、印象派の画家たちが空と雲を描きたかったその理由がわかるような気がするのだ。

その夕焼けに背を向けるようにして、ぼくはインターコンチネンタルホテルの方角に歩き始めた。

橋を渡って運河を越え、右に観覧車を見ながらカップヌードル博物館の前を通り過ぎたころには、あのシナプスの化学反応は盛大な終息を迎えつつあり、ほぼ結論めいた言葉がいくつも生産され始めていた。

その通りだとすれば、あの日以来、ぼくとも片岡くんとも姉妹が一切連絡を絶ってしまつたことの説明もつくし、理解もできた。少なくとも外形的には。

だが内面的な理由はわからない。

姉妹間に生じた恥辱と屈辱と不信のせいだったのか。

はたまた、姉妹間の尋常ならざる絆、一体意識のせいだったのか。

眞実は、ふたりにしかわからない。

でも、ぼくには後者である気がしてならないし、そうだったらいいなという思いがあった。

あの姉妹は二人で一人なのだ。一心同体なのだ。姉は妹であり、妹は姉なのだ。互いが互いの鏡であり、互いが互いの闇なのだ。

きっかけは、子どもっぽい悪戯心だったかもしれない。姉妹が入れ替わっても、バレるはずはないと安心していたかもしれないし、あるいはバレたらバレたで面白いという気持ちだったのかもしれない。

だが片岡くんの悪意は予定外だったに違いない。きっと彼はぼくがしたように、相手の左手の指先を確認したに違いない。だから、目の前にいるのが誰なのかすぐにわかったと

彼は思った。そのことを隠し、知らない振りを装い、その相手と一夜をともにするために、どのくらい強引だったのか、あるいはどのくらい汚い手を使ったのかはわからない。いずれにしても、片岡くんの悪意は姉妹にとって誤算だった。

それはぼくへの裏切りであると同時に、姉妹への挑戦だった。

たえず対称性を保つ必要があった一卵性双生児という現象は、そのとき、対称性が破れたのだ。姉妹はその破れを直す必要があった。二人で一つというアイデンティティを回復する必要があったのだ。

そんな崇高な（！）目的の前では、確かに、ぼくなんか、まったくお邪魔な存在だったんだろうね。

気がつくくと、ぼくはすでに週末のカップルで賑わう赤レンガ倉庫の2号館の横を通り過ぎるところだった。ライブ会場は1号館のホールだ。

お尻のポケットからiPhoneを取り出して時刻を見た。もうすぐ開演の7時だ。ぼくはエントランスに向かって走った。

チケットを見せて、ホールに駆け込んだ。すでに客電は落ち、満員のオーディアンスはオールスタンディングで準備万端だった。

薄明かりのステージの中央に向かって進んでいくキキとココのシルエットが見えた。そして、バックバンドの連中が機材をチェックするノイズが聞こえ、やがて、静まった。

オーディアンスが集中する。

ホリゾントのライトが噴火するように光を噴き上げ、キキとココにスポットライトが命中した。ドラムが一拍目を叩いた。オーディアンスの歓声が爆発した。

ぼくははっきりと見た。十二弦エレキギターをカッティングするキキの隣で、マイクの前に進み出ようとするココが、アコースティックギターをかかえていたのを。

ぼくの考えはやっぱり間違っていなかった。

あの夜、ぼくと光のモンサンミシエルを見たのは、瑚子ちゃんだった。

(太田 穰)